

しふ、一、二、三、は人力不要

徳川禁令考 卷一

法制禁令之部

公家

禁裏向

法式

第一章 禁裏向御法式

慶長二十乙卯年七月

一

禁中方御條目十七箇條

駿府政事錄慶長二十年(即チ元和元年)七月十七日ノ條ニ曰ク、將軍家渡御二條城、初御以後出、御於泉水御座敷、召三兩傳奏、被三仰三出公家法度之儀、則二條殿、菊亭於御前、令三開三右法度、給有二十七ヶ條、廣橋大納言讀三進之、傳長老、三條大納言其外諸公卿何公、二條殿、菊亭被三仰出之、法度尤神妙無三殘所之由被三認申云云、按スルニ、此事ハ二條城ニ於テアリト云フ、當時前將軍關白左大臣ト議シ、前例ヲ參酌シテ此十七條

第一章 禁裏向御法式(一)

ヲ擇ヒ、皇御ヲ經テ定メラル、公家御法式ト稱スル即チ此ナリ、

一 天子御藝能之事、第一御學問也、不_レ學則不_レ明_三古道、而能致_三太平_一者未_レ有_レ之也、貞觀政要明文也、寬平遺教雖不_レ究_三經史_一、可_レ誦_三習群書治要_一云云、和歌自_レ光孝天皇未_レ絕、雖_レ爲_三綺語_一、我國習俗也、不_レ可_三棄置_一云云、所以_レ載_三禁秘抄_一、御習學專要候事、

一 三公之下親王、其故者、右大臣不_レ比等、着_三舍人親王之上_一、殊舍人親王、仲野親王、贈太政大臣藤原親王准右大臣、是皆一品親王以後、被_レ贈_三大臣_一時者、三公之下、可_レ爲_三勿論_一歟、親王之次、前官之大臣、三公、在官之内者、雖_レ爲_三親王之上_一、階表之後者、可_レ爲_三次座_一、其次者諸親王、但、儲君者格別、前官大臣、關白職再任之時者、攝家之内、可_レ爲_三位次_一事、

一 清華之大臣辭奏之後、座位可_レ爲_三諸親王之次座_一事、

一 雖_レ爲_三攝家_一、無_三其器用_一者、不_レ可_レ被_レ任_三三公攝關_一、況其外乎、

一 器用之御仁躰_{作仁人}雖_レ被_レ及_三年老_一、三公攝關不_レ可

有辭表，但，雖有辭表，可有再任事，

一養子者連綿_レ但_レ可_レ被_レ用_二同姓_一、女緣者家督相續、古今一切無_レ之事、

1 武家之官位者，可爲公家當官之外事，

一、改元者，漢朝年號之內，以三吉例，可三相定，但重而於習禮相熟者，作熟一，可爲本朝先規之作法二事，

一、天子禮服、大袖、小袖、裳、御紋十二象、諸服格別、御袍、麤
 麤、青色、帛、生氣御袍、或御引直衣、御小直衣等之事、仰
 洞之御袍、赤色襦、或甘御衣、大臣之袍、襦異文、小直衣、
 親王之袍、襦小直衣、公卿着紫色雜袍、雖、殿上人、大臣
 息或孫聽、着紫色雜袍、實主、五位藏人、六位藏人、着
 紫色、至、極麤、着麤袍、是中下御服之儀也、晴之時
 雖下臈、着之袍色、四位以上襦、五位緋、地下赤衣、六
 位深綠、七位淺綠、八位深縹、初位淺縹、袍之紋、轡唐草
 輪無、家家以舊例、着用之、任槐以後異文也、直衣、公
 卿紫色直衣、始或拜領家任、先規、着用之、殿上人直
 衣、羽林家之外不着之、雖、殿上人、大臣息又孫聽、着
 紫色、直衣、布衣、直垂、隨所着用之、小袖、公卿衣冠之

時者着_レ綾、殿上人不着_レ綾、練貫、羽林家三十六歲迄着_レ之、此外不着_レ之、紅梅、十六歲三月迄諸家着_レ之、此外平絹也、冠十六歲未滿透額、帷子、公卿從_二端午_一、殿上人從_二三月酉_一加茂祭、着_レ用普通之事、

一諸家昇進之次第其家家守舊例不可申上但學問有職一作職識、政道合三動學其外於積奉公勞二者雖爲三超越可以拔成御推任御推叙下道眞備雖三徒八位下依三三才智學右大臣拜任尤規操也聲靈之功不可三棄捐二事

一關白、傳奏并奉行職事等申渡儀、堂上地下之輩於二相背、
者、可爲三疏罪一事、

1 罪之輕重，可被相守名例律，事，

一攝家門跡者、可爲親王門跡之次座、攝家三公之時、雖
 爲親王之上、前官之大臣者、次座相定上者可、准之、
 但、皇子連枝之外之門跡者、親王宣下有間敷也、門跡之
 室之位者、可依三其仁鉢、考三先規、法中之親王、希有之
 儀也、近代及三繁多、無三其謂攝家門跡、親王門跡之外之
 門跡者、可爲三准門跡一事、

一僧正權大正、門跡、院家、可以守先例、至平民者、器用卓拔之仁、希有雖任之、可以爲准僧正也、但、國王大臣之師範者格別之事、

一門跡者僧都少大繼正、法印任叙之事、院家者僧都少大繼正、律師、
法印、法眼、任先例任叙勿論也、但、平人者本寺推舉之
上、爲以相三機器用、可三申沙汰二事、

一柴衣之寺者住持職、先規希有之事也、近年猥勅許之事、且亂三萬次、且汚三官寺、甚不可忍、於此向後者、撰其器用、戒蘭相續有智者之聞者、入院之儀可有申沙汰事、

一 上人號之事、碩學之輩者爲、本寺一撰三正權之差別、於三
申上二者、可被成勅諭、但、其仁鉢、佛法修行及二十
箇年二者、可爲正、年序未滿者、可爲權、猥競望之儀
於有之者、可被行三疏罪事、

右、可、被、相、守、此、旨、者、也、

慶長二十乙卯年七月 照 實 在 判 二條關白

秀 忠 在 判

家康在判

右十七箇條ノ原書ハ萬治四年焼失ニ付、仍ホ副本ヲ以テ書寫シ之ヲ進呈スルノ由アリ、今其末文以下ヲ左ニ附記ス、

此十七衛條、家康、秀忠、照實先制之趣也。萬治四年正月十四日、內裏炎上之節、就令燒失、今度以三副本、如舊文二篇、調之爲後鑑二加二判形二者也、

寬文四甲辰年六月三日

光平在判 一條攝政

家 綱 在 判

禁中方御條目、以三吉良若狹守、被進之候、上意之趣、委細若狹守可爲演說、候、右之趣、禁裏法皇江被達三敘聞、尤存候、恐惶謹言、

长 四

久世大和守廣之

稻葉美濃守正則

阿部豐後守忠秋

酒井雅樂頭忠清

勸修寺前大納言殿

飛鳥井前大納言殿

引書 十三本御制法 慶延令條
般制錢 御觸書 條令條

元和元乙卯年八月

二 公武法制應勸十八箇條

按ニ、此十八ヶ條ハ舊籍其來由ヲ載セス、而シテ第五ヶ條ヲ闕ク、且第十八ヶ條ニ東叡山云云トアルモ年次ト合ヘス、恐ラクハ誤脱アラム、宜シク略シテ載セサルヘシ、然レトモ其撰前書ニ後ル、僅ニ一月、而シテ書中ノ條件相差制シテ一時ニ成ル者ノ如シ、是レ國體ヲ維持スル至重ナル者ナリ、故ニ姑ラク併セ收メテ時勢ヲ知ルノ參驗ト爲ス、

倭朝、天神地神十二代、天照大神宮國政明白、而神代ヨリ傳玉フ處三種神器、天子四海萬民撫育之爲メ也、神國ノ例トスル處ハ天魂ナリ、皇帝ハ地魂也、天魂地魂ハ日月也、日月行運之心ハ、天子叙心ヲ守玉フ根本ナリ、故ニ宮中ハ九天之意ニシテ、九重ノ内裏、十二門方十殿ハ、天ニナラヒ、皇居シ玉フカ故ニ、皇帝ハ十善萬乘也、然レハ仁孝聰明、至剛研學、如顯可ニ爲標準一事ヲ日毎ニ天拜シ玉フヘキ也、學問手習御勤行不可有御懈怠、萬民無愁色、四海太平成時ハ、明德アラハレ玉フ

シ、多ク人ヲ殺害シ、破官意候處也、僧タリト云トモ、猥ニ免許スヘキニアラス、大納言ニ准シテ山ヨリ重シ、天宮宗門七大僧正、禪宗門五大僧正、淨土宗門三大僧正ニ限ルヘシ、其外僧官相改事、諸宗門本山ヘ可申候、猥ニ僧正免許有間敷、況ヤ僧官可奉、第六之事、諸宗宮方、御門跡、高官ヲ重ル事時ニ應セス、所謂ハ佛體ナリ、佛道ハ釋氏ノ弟子ナリ、大聖世尊釋迦如來ハ釋氏ヨリ出テ、衆生濟度ノ爲ニ、頭陀ノ行、乞食ノ事ヲ定メ、三衣一鉢ノ三衆無庵此間恐有誤鳥ノ兩翼ナリ、殊ニ後世極樂淨土ノ道教ニシテ、現世ノ役ヲイタシ官祿ノ論、佛意ニ叶フヘキニ非ス、高官之事、寺院相悞ヘシ、宮門跡ニ限ラス、僧衆可ニ心得、第七之事、

國中之諸侯、祿ノ高下ヲ論セス、十六以上相果ル時ハ、順養子ヲ以テ可令其家相續、十六以下幼少ニシテ、相果候時ハ、世續可レ有之所謂ナシ、家斷可申候、是天理之應スル所也、雖將軍相續、可爲同事候、養子相續十六歳ニ及、幼少ニシテ致家督候處、其弟有之時ハ、心當養子書上可然候、然時ハ相續家督爲致可

也、三種之神器御守、第一之事、

淳和樂學兩院別當職、關東將軍江被任候上ハ、三親王、攝家ヲ始、公家並諸侯ト雖トモ、悉致支配候、國役一切可爲知、政道奏聞ニ及ヘス候、四海鎮致シカタク時ハ、其罪將軍ニ有ヘシ、第二之事、

叡山ハ、王城之鬼門ヲ守ラシカ爲、桓武天皇山門神興振之例有之事ハ、王法政道人氣ニ應スル處也、龍體之御守正シカラス時ハ、天魂憤リ怒テ、疫神帝都江入、洛陽之民愁煩ス、雖然今政務關東江預リ奉ル故ニ、山王ヲ以可致將軍氏神、若山門相隨ヘサルニ於テハ、可爲其罪、第三之事、

往昔帝王、勢州熊野神社佛閣ニ行幸アリ、畢竟萬民之煩ヲ正シ玉フ處也、王臣政道ヲ改テ、武官政道ヲ預リ奉ル、若不知時ハ、將軍之誤リタルヘキ也、故當今皇帝、法皇、仙洞宮中之外、行幸之儀奉止、第四之事、

僧正官之事、天理ニ不應シテ、甲州武田信玄入道、越州長尾謙信入道江、免許シ玉フ、此官ハ僧行正シク相守ル處ノ官ナリ、肉食妻帯ヲ破候武田、長尾等ハ合戦ヲ出

申、第八之事、

國々諸侯、雖勅命、宮中參内仕間敷候、西國諸大名往來ノ砌洛陽往來令停止候、密々往來候事、於露顯ハ、何程大祿之家成共、可致絶家、若洛外見物致度者、其極相屈可申、其砌可及沙汰候、差免候共、三條橋之中ヲ限リ申候、第九之事、

諸大名官職、其家之先祖家格ヲ以、兩院別當可及沙汰候、官位昇進致度、直ニ天奏迄令奏聞願候當人、並奏聞之天奏、其外取持候事迄、急度可レ行罪科也、其心得可爲肝要、第十之事、

公家ヨリ武家ニ縁組之事、關東江相違、將軍家ヨリ及沙汰、其上ニテ取組可申、若其機無之取結ヘレ候ニ於テハ、其罪可申付候、縁組之上モ猥ニ宮中之趣其沙汰仕候機、相聞申ニ於テハ、可爲重罪事、從ニ公家縁邊ノ武家ニ金銀無心等申入候事、相悞可申候、所謂ハ祿重ク金銀自在ニ、取扱ヤウニ心得候得共、萬石ハ萬石ノ國役相掛リ、天下之御用相勤候、公家ハ小祿成トイヘトモ、國役ヲ相勤、民ヲ撫育スル役ナシ、然レハ宮中ヲ相

勤テ、家ノ扶持相立候ノミ也、奢ナクシテ相勤候時ヘ、小祿トイヘトモ安シ、況ヤ家相續未代無_レ滞、武家國役誤ル時ヘ、家ニ相掛リ可_レ申故、遠慮致ヘシ、第十一之事、屋張大納言義直、紀伊大納言頼宣、兩人將軍ト三家ニ可_レ相定、是將軍萬一傍若無人ノ振舞ヲ致、國中之民可_レ及_レ愁時ヘ、右兩家ヨリ相代リ可_レ申、然レハ天下政道ニ相掛リ申候、依_レ之國役相除、官職從三位ヲ賜リ、尾州六十二歳大納言ヲ賜リ、紀州六十六歳大納言ヲ賜ルヘク候、國中諸侯將軍ニ準シ、可_レ致_二尊敬_一、第十二之事、尾紀兩家、國役相除申候得ヘ、勢州天照大神宮、日本國開闢之總社ナリ、二十一年目ノ遷宮ヘ、國家安全、天下泰平、五穀成就ヲ守ノ例ナリ、故ニ右遷宮ノ檜ヘ、兩家ヨリ領山ノ木ヲ伐出シ、遷宮無_レ滞、主年毎ニ相勤可_レ申、尤尾州紀州、相互ニ相代リ々々可_レ勤、常々山木心掛、第十三之事、水戸宰相頼房、副將軍可_レ賜_二免許_一候、其所謂ヘ、將軍國政成時ヘ、老中諸役人令_二評定_一、水戸家ヨリ差圖ヲ以テ、尾州紀州兩家ヲ見立、將軍相續可_レ養聞候、萬一兩

家不_レ應_二其任_一時ヘ、イッレ諸侯ノ内、天下治鎮可_レ致品量、養聞候ヘ、水戸家ニ可_レ限、第十四之事、親王ノ政務相勤申候ヘ、源二位頼朝公ヨリ日本支配、武家相勤申所也、武家ノ預リ奉ルモノヘ、公家國政ユルクシテ、國鎮スルコト叶カタシ、今上皇帝無_レ據、往昔政道可_レ致、旨家康家ニ勅命_一也、然レハ小祿ニシテ國政難ニ相成、民ノ撫育致シカタク、國役勤カタシ、公家ヨリ武家ヲ輕スル事心得違也、所謂普天之下無_レ不_レ在王土、國民撫育ヘ、今上皇帝天勅ヲ蒙リ玉フ故ニ、萬官萬士ニ命シ、國ノ安全スヘクト也、公卿ニモ勤行玉フニ、人氣不_レ應_二シテ武官ニ命シ玉フ也、國中靜ニ意下ノ差別ヘ國ノ亂也、勤行ヲ重スル、第十五之事、源二位頼朝治世之時、大江大膳大夫廣元、鎌倉下向ニ及ヒ、武家ノ變法ヲ定ム、何レ聖德太子十七箇條ノ憲法ヲ根本ト可_レ致、然トイヘトモ、法ヘ天地ノ理ナリ、明白ナルヘ、世人用ヒ可_レ申、天地和合ニ不_レ應理ヘ、衆人不_レ用_レ之ナリ、新法能糺シ、民心應セ_レ可_レ用、古法モ時ニ不_レ應_レ暫ク止ムヘシ、日本老中、若年寄、寺社奉行ノ三

役、可_レ爲_二評定_一、第十六之事、

日本國中制札之事、寺社奉行名前ヲ以テ、國中萬民ヲ教ヘシ、國中人數相集候事、寺社奉行判物ヲ以、可_レ呼出、寺社奉行判物無_レ之時ヘ、勅命嚴命成トモ、人差出不_レ申、古例ヲ以、社人寺院之決斷致スヘシ、第十七之事、日本國致_二支配_一東叡山住職ヘ、今上皇帝御血脉ヲ以テ、開東御下向可_レ有_レ之事、將軍在城ノ鬼門守ル故、御骨肉之君、佛法御修行御往職有_レ之時ヘ、天下泰平、國家安全之基トスル也、第十八之事、

右十八ヶ條之趣、對_二君爲_一定目、相立候者、所_レ奉_レ恐也、雖_レ然蒙_二勅命_一、今般武家政遺、國家太平可_レ致理之定目十八ヶ條、可_レ被_レ懸_二紫宸殿_一候、是則奉_レ應_二勅命_一也、仍如_レ件、

元和乙卯年八月

家康 在判

(右據諏訪氏藏本記)

寛永三丙寅年十月五日

三

中宮御所御制法

按_二、寛永日記寛永三年十月ノ條ニ曰ク、去頃御入洛_一之時、中宮御所御作法不_レ應_二愚名_一ニ付

今度御制法被_二仰出_一トアリ、即チ此ナリ、

一門出入之事、

なとこ女ともに、酉の刻の前を限るへし、六ツ過候は
入、たとへ手判ありとも、とをすべからざる事、

一女上下出之入事、

權大納言、右衛門のすけ兩人の手判に、あまのふぜん
のかみ、大はしあごのかみうら判にて、出入申付へ
き事、

らく中におや兄弟これある女は、日歸にいとまを正
五九月出すべき事、

女上下によらず、あいわづらふ時は、ぜんあくを見
分、わづらひあしきを出すべき事、

寺社參詣、かたくちやうじの事、

一せつけ、宮がた、御もんぜき、せいくわ、その外くげのめ
んく井にしよ大みようれいの事、

女中まかり出しかるべきかたへは、權大納言、新大納
言兩人まかり出へし、なを周防守さしづにまかすへ
き事、

一 寺社のともからは、禁中御さほうにまかすべし、これより
周防守さしつ次第の事、

一 くすしの事、参内のともからは、ぶぜんの守、越後守つ
ねにあり所まてまいるべき事、

一 いづかたよりもつかひこれ有て、女おらいでかなわざ
る時は、出羽、いづみ、かわち、右三人出べき事、

一 町人并にしよさいく人等、同女屋共などの事、
用の事あいかなへ候ものは、をとこはぶぜん、あちこ
つねにあり所まてとをるべし、女は權大納言つぼね
まて越べき事、

一 あそびものけんぶつの事、
いつせつむようたるべし、しぜん禁中御らんにおい
ては、かくべつの事、

一 しよ家中江男女ふるまいの事
女は一ゑん無用なり、たゞし、あひこすべきしよあ
るにおいては、周防守さしつにしたがふべき事、

一 しぜんかなはざる用の事あるにおいては、ぶぜんのか
み、あちこのかみおくまてとをるべき事、

一をそこ女はしりこみの事、
 一せつきよりすべからず、萬一申分あるにおいて
 は、周防守ところ江相渡すべき事、
 一おくの庭ざうらの事、
 男いらさる所へは、女どもを遣しざうら申付べき事、
 一まかなひかたの事、
 別紙にこれあり
 一つばねくおきいろりの事、
 ぶせん、むらじ相談の上、右いろり可申付事、
 附、かなあんとんを、右兩人見合、相渡すべき事、
 一よろつつかひ物の事、こん太納言、右衛門のすけすみつ
 き次第あいとくのふべき事、
 右のむねをなかく相守へし、つぶさなる事は、ほう書に被
 仰出もの也。

寛永三丙寅年十月五日 家 光 黑印

引書 東廬延令實錄條 殿制祿記 令條

寬永三丙寅年十月五日

四 中宮御所女中法度、

定

一 女中上下共に、親の正忌日には御所中を出、下やしきに可有之事、

一 忌頃の時は、親兄弟なき女中は下屋敷江出すべし、子又は兄弟ある人も、おさなき子兄弟の所江は不可出事

一同かへりの女の事、其日の暮に改可申事、

一 おか大貳、のと、井御妻使三人の事、かなはざる用の時は出すべき事、

一 親子兄弟煩候時の事、煩大事に及候時は出すべき事、

右、此旨をあい守らるべし、仍執達如件、

寛永三年十月五日

信 濃 守

主 計 頭

大 炊 頭

周 防 守

引書 嚴制錄令條 十三 慶祿記 御制法條

寛永七庚午年七月十三日

五 御即位ニ付御條目所司代江達接ニ、敕令類纂ニハ
板倉周防守歸京之
趣節被仰出
トアリ、

第一章 禁裏向御法式（五）

覺

一 女一宮御即位之儀、院御所御即位御道具のことく可致
用意事、

一 御即位御日とりの儀、九月上旬吉日次第之事、

一 被成御即位御きよ所以下之儀、當院御所御即位之時之
様子ニ諸事可仕事、

一 萬事後陽成院御時のことく可被成御馳走候間、院領之
儀もいつかたに雖有之、故院之御領を相尋、當院之御領
ニ可仕事、

一 院參衆之事、故院之御時之人數之ことくたるべき事、

一 攝家衆江可申者、御幼主と申、女帝之御事候間、爾以有
來のことくは御まつりことたくしく可有御沙汰之旨、
急度可申事、

一 公家衆家々學問無油斷被仕候様ニ可申渡候、自然形
儀之躰於有之者、可致言上事、

一 院に被爲成候上者、中宮御所御作法も院之御所之御作
法にしたかふべき事、

一 攝家、親王家、門跡衆參内之刻者、權大納言罷出可有御

馳走、其外之公家衆參候之時は、おもてつかひ衆並豐前守、越前守馳走可申事、

一傳奏之事、下接ニ、國文、

一武家官位之事、無御執奏而從禁中不被仰出候様ニ可申上事、按ニ、本條ハ即チ前ニ記スル十八ヶ條第十條ノ意ナリ、

一從最前如被仰出、壹萬石ニ而年中之御政可相勤、但、あらたまりまれなる御政は格別之事、按ニ、元和九年一萬石ノ田地ヲ以テ禁中ニ附

一當長橋知行米被成御渡由候間、請取候而當長橋江相渡、前長橋宛行者、院御所御島之並之知行程可相渡申事、

一御島簡以下之儀、不屆之者有之ニおいては、令退出、殘所者其儘可置申候、退出かわりをへかゝへ申ましき之事、

一一條御城御法度之儀、大坂御法度之ことと可申付事、

寛永七年七月十三日 引書 東武實錄
教令癸亥錄

明暦元乙未年正月十一日

六 新院御所御定目

條々

一官位并表向之儀、一切御いろひ被成間敷事、

一總而御見物之儀、新院御所ニ而者一切可爲御無用、禁中、仙洞、女院御所において、御一同ニ御覽之時者不苦事、

一御連枝之儀は、年始御禮之時計可爲御對面、御連枝之外者、縱令攝家、親王家、門跡たりとも、一切御對顔被成間敷事、

一御祝日并拜賀之時公家衆參上之儀、新院之傳奏江申屆之、自表可爲退出事、

一御幸之儀者、仙洞、女院御所へは不苦、禁中江者、仙洞、女院御一同之時者可然也、御一人ニ而御幸、一切御無用たるべき事、

附、御幸之時、院參之公家二人宛可爲供奉事、

以上

明暦元乙未年正月十一日 家綱 黑印

引書 十三本御制
慶延今條
廢制錄
慶曆記

寛文三癸卯年正月廿九日

七 禁裏御所御定目

一第一御行跡不輕々敢被守古風、御心持無敬神深、仁忍深、御短可感、無御意、萬等之事、無油斷可被申上事、

一第二御學問御心ニ被爲勤樣之管計、可爲肝要事、

一候初ニも御身上御相應之御遊興、可被申行事、

一於被三聞召ニ可被移御心、無用雜談、或鳥獸營業之類、御學問之儀、或爲別、被申上之間敷事、按ニ、本註、國ノ字、疑ラクハ、國ノ字、

一世上之事、於河原珍敷傀儡、放家、狂言等之沙汰於聞召二者、有御覽一度可被三思召事、以下疑、有三處疑、

一於御前下様之野卓成事被三申上間敷事、

一如何様之遺恨雖有之、於營中及口論者、不理論理非、左右共ニ可爲三重罪事、

一男女之間之御法度、堅可被三相守事、

寛文三年正月廿九日

引書 今條錄

寛保二壬戌年

八

禁裏殿御條目

一禁裏仙洞たりとも、御政不正則嚴敷可奉三諫言事、

一親王、宮御不行跡之節者、被任先例可令三遠流事、

一三公、諸公家之面々、不行跡之節者、任先規之例三遠流

第二章 禁裏附役人令條 (八一九)

或死刑之事、

寛保二壬戌年原書欠
月日

老中連名

引書 今條錄

按ニ、此條目第二條ノ如キハ、徳川氏ニ其例ヲ見ス、第三條ハ先例アリ此ニ附記ス、創業記考異慶長十四年八月ノ條ニ云、去年ヨリ内裏御近習之女房、廣橋局、唐橋局以上五人、公家ニハ落熊、鳥丸、飛鳥井兄弟、大炊御門、花山院、徳大寺、松木并醫師兼安カ男御後ト云者等、不形儀ニ付主上遊饌不耐、殿府へ以勤使右之公家ヲ可被斬罪由被仰下、依之板倉伊豆守ヲ殿府へ召下仔細ヲ聞給フ云云、同年九月十日ノ記ニ云、禁中五人ノ局伊豆國ノ島へ被流去ル二日出京、其故何モ變ラ刺、下女二人相縊、五人一所ニ遊罪也、公家衆ハ花山院へ眼長カ島、飛鳥井少將ハ隱岐島、松木ト大炊侍從ハ薩摩カタ、薩摩島、飛鳥井ト難波ハ先殿河へ被召寄、鳥丸、徳大寺ハ御赦免也、諸將并兼安ハ京都ニテ殺戮也云云、

第二章 禁裏附役人令条

寛永二十癸未年九月朔日令條

九

條々

一禁中方之儀、長橋局、兩傳奏江伺之上、先規之御作法を相守へし、勿論萬事周防守可得差圖事、

一諸事兩人令相談、分別に及かたき儀者、板倉周防守任差圖可申付之事により新院之傳奏へも可申談事、

附、御所格別たりといへとも、存寄儀有之において、天野豐前守、高木善七郎、大岡美濃守、野々山新兵衛、この四人互に可申談事、

一官位昇進之輩井出家社家其外諸職人、受領等之御禮として參上之時者、兩人出合返し申へき事、

一醫陰之輩參上之儀、女院御所之如くたるへき事、

附、諸職人御用之時は、兩人部屋まで可召寄事、

一御所禱人之儀、周防守差圖之外者無用たるへき事、

附、被下物同前之事、

一御門番井局かたよりおもてへいつる口、同御臺所口、此三ヶ所御番者、兩人同心之者ニ可申付事、

一火之用心、かたく可申付事、

一總而女中御門出入之儀、兩人以手形可出之、暇之儀一年に三度ツ、たるうへは、此外無據子細有て不罷出して

不叶事においては、兩人せんさくの上可出之事、

一御座間とおもてかたと間しめの口、晝夜ともにじやうをおろしおき申へし、晝は御用之時計り明く可申事、

一局かたしめの番所之内より、おとこ下々迄一切入申ましき事、

一おく御庭掃除之儀、女に可申付之、但、男不參して不叶時は、伊賀衆召連參るへき事、

一御樽返し之儀は、禁中御作法のことくたるへき事、

一萬御膳方井被下物之儀、大乳人と兩人相談いたし、可申付之、自然分別におよひかたき所は、周防守可致相談事、

一諸事入用之儀、五味金右衛門手前より、しなく其時々に兩人以手形可請取之事、

附、右人用勘定之儀、周防守江申斷、毎年歲切ニ可相極事、

一萬入用おもておく共に、其役人之手前を兩人相改、是又年切に勘定きわめさせ、周防守ニ帳面見せ可申事、

一堂上方井女中方、地下諸役人に至る迄、先規之作法を相

背者勿論、その外何にても新規にめづらしき事有之は、

周防守ニ申願之、江戸江可言上事、

右條々、可相守此旨者也、

寛永二十年九月朔日 家光 黒印

榊原三郎右衛門とのへ

中根五兵衛とのへ

引書 十三本御制法

承應四乙未年正月十一日令條

一〇 條々

一禁中方之儀、長橋局、兩傳奏江伺之、先規之御作法可相守之、勿論板倉周防守、牧野佐渡守可得差圖事、

一諸事令相談、難及分別所者、周防守、佐渡守相談之上、可申付事、

附、御所雖爲格別、存寄儀於有之者、大岡美濃守、野々山丹後守、中川勘三郎、深津彌七郎、此四人互可申談事、

一官位其外表向之御用者、爲傳奏之役間、内々ニ而兩人執奏一切無用之事、

一禁中不斷出入在之、表裏三口之御門御番之儀、兩人同心之者ニ可申付事、

一火之用心、堅可申付事、

一萬御遣用表方御内々共ニ、長橋局を以被仰出之儀、如先規無陳覺可申付之、自然新規之被仰出在之而、兩人難及分別者、周防守、佐渡守可致相談事、

一萬事御入用五味備前守手前ヨリ、如先規品々兩人以手形、其時々ニ可受取事、

附、勘定之儀、兩傳奏井周防守、佐渡守へ申斷、毎年歲切ニ可相極事、

一奥方井御臺所方諸事御膳入用、其役人手前兩人相斷、是又年切勘定爲極、帳面周防守江見せ可申事、

一堂上方井女中方、地下諸役人ニ至迄、先規之作法を相背輩は勿論、其外何ニ而も新規ニ珍事於有之者、周防守、佐渡守ニ申願、江戸江可言上事、

右條々、可相守此旨者也、

承應四年正月十一日 家綱 黒印

高木伊勢守とのへ

青木 新五兵衛 とのへ

引書 令條 十三本御制法 慶延令條 慶應記 殿制錄

寛文四甲辰年八月五日令條

一 條々

一 諸事兩人令相談、難及分別儀者、牧野佐渡守任差圖、可申付之、依事兩傳奏江も可相談事、

附、御所離爲格別、存寄儀於有之者、御所方江付置之六人相互ニ可相談事、

一 醫陰之輩、女中方江參上の時は、本院御所可爲如御作法事、

附、諸職人御用之時者、兩人部屋迄可召寄事、

一 御門番所之儀、兩人同心之者ニ入念出入猥無之儀、かた可申付事、

附、女御御方御門番所見廻、入念可申付事、

一 火之用心、堅可申付事、

一 萬御所方之儀、猥無之儀遂兩人相談、可申付之、自然難及分別所者、佐渡守江可受差圖事、

一 諸事入用之儀、鈴木伊兵衛手前より、品々その時々ニ以

兩人手形可請取事、

附、入用勘定之儀、佐渡守江申斷、毎年歲切ニ可相究事、

一 萬入用共役人之手前を兩人相改之、是又年切ニ勘定宛させ、佐渡守ニ帳面見させ可申事、

一 堂上方并女中方、地下諸役人ニ至る迄、先規之作法を相背輩者勿論、其外何にても新規ニ珍敷儀於有之者、佐渡守ニ申唐之、江戸江可致言上事、

右條々、可相守此旨、若不念之儀於有之者、兩人可爲越度者也、

寛文四年八月五日

家 綱 黒印

小笠原丹波守 とのへ

鈴木淡路守 とのへ

引書 十三本御制法

寛文八戊申年三月廿八日令條

二 覺

一 今度萬民甘ろきのためと被思召、諸事儉約之儀諸國江被仰出候、然る間禁中御所方女中、衣服輕諸道具美麗無

之様ニ可被申達事、
殿制錄、先例政典には、美麗ニ無之様可然候事、トアリ、思召候事、トアリ、然候左候へは、下々江之いましめにも

一 御能仕振舞等之時、萬端省暑、御酒宴も輕被仰付、御節會等之御作法之外者、不夜更内ニ、堂上方何れも御退出可然事、

一 堂上方之衆中御會合之節者、萬事被用儉約、下々に至る迄不法無之様ニ可然事、

一 堂上方之衆、子細無之して遠所へ御越之儀不可然之間、其品により可有言上事、

一 禁中御所方御門出入之儀、守先年之御條目、彌念入相改、若不寧之儀於有之者、可被致食議事、

一 左義長御作法迄ニちいさく被仰付、并盆之燈籠輕有之様に可然事、

一 禁中方よろしき御作法之儀、於言上者、御満足に可被思召之間、可被致法進事、

右條々、相守之、油斷有之間敷候、若猥之儀被承之、於無言上者、面々可爲越度者也、

寛文八年三月廿八日

内 膳 正

但 馬 守
大 和 守
美 濃 守
豐 後 守
雅 樂 頭

青木 遠江守殿
服部 備後守殿
野々山 肥前守殿
築田 隴岐守殿
中川 飛騨守殿
松下 伊賀守殿
小笠原 丹波守殿

鈴木 淡路守殿 引書 十三本御制法 令條 慶延令條 慶應記 殿制錄

正徳五乙未年令條

三 條々

一 院中御門番之儀、與力同心之者ニ申付、嚴重に可相守事、

附、女院御所御門番所、見廻之、入念可申付事、

一 醫陰之輩參上之儀、可爲如先規御作法事、

附、諸職人御用之時、兩人部屋迄可召寄事、

一 火之用心、堅可申付事、

一 萬事御遣用、内外共ニ任先規無疎略可申付之、若又新儀にして、兩人難及分別事者、所司代江可相同事、

一 諸方御賄方御入用、其役人手前を兩人相改之、年切に御勘定極させ、其帳面所司代江見せらるべき事、

一 堂上并井女中方、地下諸役人に至迄、先規御作方を相背輩者勿論、其外何事に限らず、新儀珍敷事ニおいては、所司代江申届、江戸江言上可致事、

右、可被相守此旨者也、仍執達如件、

正徳五年月日 引書 正徳新令

寛保二壬戌年令條

一四

條々

一 禁中方之儀、長橋局、兩傳奏江伺之、先規之御作法を守らるへし、勿論萬事所司代可受差圖事、

一 諸事兩人令相談、難及分別者、所司代申談之、其上可申付事、

一 官位其外表向之御用者、爲傳奏役之間、内々にて兩人執

奏一切無用之事、

一 禁中不斷出入有之所々御門番之儀、與力同心之者ニ可申付事、

一 醫陰之輩女中方江參上之時、猥無之儀可爲如先規事、

一 火之用心、堅可申付事、

一 萬御遣方内外共ニ、以長橋局被仰出之儀、如先規無疎略可申付之、自然新儀被仰出有之而於難及分別者、所司代可致相談事、

一 萬事御入用、如前々代官共手前より、品々以兩人手形、其時々可受取事、

附、勘定之儀、兩傳奏并所司代江申断之、毎歳年切ニ可相極事、

一 奥方并御臺所方諸事御賄入用共、役人手前を兩人相改之、是又年切に勘定極させ、帳面所司代江爲見可申事、

一 堂上并井女中、地下諸役人ニ至る迄、先規之作法を相背輩へ勿論、其外何にても新儀之珍事有之ニおゐては、所司代ニ申届、江戸ニ可致言上事、

右之條々、可相守此旨者也、

寛保二壬戌年原書欠
月日

引書 教令類纂

安永三甲午年八月

一五 御所向取締ニ付禁裏御附并町奉行江達

一 御所役人取次以下私欲之筋、此度吟味之上夫々御仕置

被仰付候、一昨御所向役人共風儀不耳、私曲之儀をも前々より仕來と心得違、不法之儀共有之趣ニ付、以來御取

締方之儀兩人相談、是迄之仕來ニ而も、不宜儀者相改、

御所役人共不正之勤方正當ニ相成候様取計宜敷、都而

御入用向之儀者、向々より所司代江申立候分、不依何事、

兩人江相違ニ而可有之候間、致吟味、存寄之趣可被申達候、依之、此度從江戸禁裏御賄頭一人并勘定買物使兼役

之者二人被仰付、被差遣候、輕き役所江者信濃守同心三

人出役之儀、猶御入用筋爲吟味、御勘定奉行支配京都取調役人被仰付、被差遣候間、諸事兩人之手ニ付致差圖、

御取締宜敷様相談可被取計候、 引書 教令類典

第三章 禁裏向御造營令條

按ニ、禁裏向御營繕ハ皆武家ノ擔任ニ屬ス、凡土木ノ事興ル、其輕キハ在京ノ幕吏之ヲ司リ、重キハ關東ヨリ大小ノ官員上京シテ、百工ノ雇夫ヲ率キ其役ヲ重シ奏功シテ歸ル、而シテ其諸官營行ノ前幕府ヨリ教ヲ降シ、老中ノ下知條ヲ副へ、殿ニ檢査ヲ加フ、興役毎ニ此格例アリ、其條辭大同小異甚々殊文ナシ、今承應、寛文、延寶ノ三令條ヲ記ス、其他ハ推知ス可シ、

承應三甲午年三月五日

禁裏御造營令條

一六

條々

一 今度禁中御作事中相互ニ申合、不違滞様可入精、諸事永井信濃守差圖にまかせ、可極之若其上不落着之儀有之ニおいては、板倉周防守可及相談事、

一 喧嘩口論堅く制禁之畢、若有違犯之族者、不論理非、變方可處斷罪、勿論令荷擔者、其咎可重於本人、萬一喧嘩口論火事有之時、役人之外一切其所江不可馳集事、

「何事において申分有之者、普請以後可及沙汰、たとひ雖有道理、申出聲可爲曲事之事、

附、押買押賣諸事不可狼藉事、

「人返之事所令停止也、於有申趣者、普請相濟可沙汰之、但、重料之人へ違奉行所、可受裁許、不可致私之出入事、右、相守此旨、可申付者也、

承應三甲午年三月五日

家綱 黒印

同下知狀

一七

定

「今度御作事中、萬事下奉行之事遂相談、御普請不滯様可入念、御材木其外諸色請取渡等之儀、無甲乙可仕正路事、

「小屋中火之用心可入念事、

「大工木挽日傭人足之儀、毎日下奉行入念可改之事、

「御材木つかひ所可入念、下奉行并大工之棟梁差圖を不_レ受して、御材木不可切捨事、

附、請取之諸色不紛失様可仕事、

「請取置諸色斷なくして他之組よりつかふへからざる事、

「請取之御家之内江他之手傳人足等入込へからず、但、不通して不叶儀於有之者、其趣前廉相斷、可通候事、

「諸職人并日傭人足等役所江出る時、日晚及退散刻限、下奉行差圖次第相背くへからざる事、

「釘かんなの料等は^{【マツ】}は大工可受之、用木のきれ一切不可取事、

右、相守此旨、堅可被申付、若違犯之族有之へ、礼料之輕重、急度可被相計者也、

承應三年三月五日

伊 豊

後 豆

永井信濃守殿

永井日向守殿

水野石見守殿

五味備前守殿

中坊美作守殿

竹中左京殿

引書 十三本御制法
條令

寛文三壬寅年二月十六日

一八 御造營令條

條々

「今度禁裏製作事相互申合、不遲滯之様可入精、諸事任小出越中守指圖可極之、其上不落着之儀有之者、牧野佐渡守可及相談事、

「喧嘩口論堅制禁之記、萬一有違犯之族者、不論理非、雙方可處斬罪、勿論令荷擔者、其咎可重於本人事、

「於何事申分有之者、普請相濟可及沙汰、雖有道理、申出聲可爲曲事、

「自然喧嘩口論火事有之時、役人之外一切其所江不可馳集事、

附、押買押賣諸事不可狼藉事、

「人返之儀所令停止之也、於在申趣者、普請相濟、可沙汰之、但、重料人有違奉行所、可受裁許、不可私之出入事、右、相守此旨、可申付者也、

寛文二年二月十六日

家綱 黒印

一九 同下知狀

覺

「今度御作事中、萬事下奉行之事遂相談、御普請不滯様可入念、御材木其外請取渡等之儀、無甲乙可致正路事、

「小屋中火用心、かたく可申付之事、

「御作事請取之場所、造畢之遲速を不可論事、

「大工木挽日傭人足之儀、毎日下奉行可改之事、

「御材木つかひ所可入念、下奉行并大工之棟梁指圖無之して、御材木切捨へからざる事、

「釘鉸かな物以下つかひ所、是又下奉行大工棟梁可入念事、

「請取之諸色、不紛失様可仕之事、

「請取置諸色、斷なくして他之組よりつかふへからざる事、

「請取之御家之内へ、他之手傳人足等不可入込、但、不通して不叶儀於有之者、其趣前廉相斷、可通事、

「諸職人并日傭人足等役所へ出時、日晚及退散之刻限、下奉行指圖不可相背事、

「釘かんなの料等は^{【マツ】}は大工受用すへし、木きれ一切不可取之事、

寛文二年二月十六日

引書 古今制度集

此狀、末文及司務諸官ノ名ヲ載セズ、先例ニ拠ル